第93回 会社訪問

株式会社 岡村製作所

会社プロフィール
代 表 者：代表取締役社長　中村雅行
本　　社：〒220-0004　神奈川県西区北幸1-4-1 天理ビル19F
T E L：045-319-3401
創　　業：1945年10月
資 本 金：18,670,000,000円
事 業 所：追浜、高畠、つくば、富士、御殿場、中井、鶴見
事業内容：スチール家具全般、産業機械などの製造・販売など
U R L：http://www.okamura.co.jp

（株）岡村製作所　社長　中村　雅行 氏へのインタビュー

聞き手：夏目 知佳子（広報委員）　蔵満 邦弘（専務理事）
（取材・撮影・編集協力：クリエイティブ・レイ㈱）

時代の変化を先取りしたモノづくり精神で革新と快適を届ける総合オフィスメーカー

── 御社の創業は終戦直後の 1945 年 10 月と伺っています。現在に至るまでの会社の歩みをお話いただけますか。

弊社は終戦まもなく、横浜で行き場を失った飛行機製造会社の技術者たちが中心となり、鉄板を加工して鍋や釜を製造するところからはじまりました。もともと「動くモノ」へのこだわりが強かったということもあり、戦後初の国産飛行機の製造を行うようになりました。しかし、資本家もおらず、社員が資金を出し合って立ち上げた会社ですから、やがて採算が合わなくなり、飛行機事業から撤退することになりました。

その後は、いずれ欧米のように車の時代が来ると見込み、当時はまだ珍しかった自動車に着目し、自動車事業に転換しました。技術者たちは、ポルシェのようなスポーツカーを作りたいと思っていたそうですが、スポーツカーのニーズがないため、主に商用車を製造していました。

ボディの製造には飛行機の技術が、シートや内装には家具製造の技術が活かされ、生産はすべて自社で行われました。しかし、自動車の製造には飛行機同様、多額の資金が必要でした。そこで、融資を受けるために、銀行にお願いしたのですが、当時、その銀行は

終戦直後の昭和20年（1945）10月に横浜市磯子区岡村町で創業

昭和28年（1953）戦後初の国産飛行機「N - 52」を製造

昭和32年（1957）国産初の流体変速機を搭載したFFオートマチック車「ミカサ」を製造

他の自動車メーカーにも融資しており、ふたつも自動車メーカーに融資することはできないと断られてしまい、泣く泣く自動車事業から撤退することになりました。

飛行機、自動車を諦め、次に何を作ろうかと悩んだ末、オフィスや家庭、店舗など「人が集まるところで使うモノを作ろう」という理念のもと、現在の事業につながる家具づくりに方向転換していきました。製品づくりを続けていくうちに次第に軌道に乗りはじめ、事業も広がっていきました。

当時、社員に海軍出身者が多かったこともあり、英語が堪能な彼らが、欧米のメーカーとの技術提携を拡大していきました。

昭和３０年代になると、アメリカのオフィスで使われているスチール製の机を製造し、販売しました。当時の家具は木製が主流だったため、同業者からは「スチール製の机なんて売れるわけがない」と囁かれていたそうです。案の定、木の文化が根強かったこともあり、当初はスチール製の机が売れず、倒産の危機に陥りましたが、「良い品は結局おトクです」をモットーに、長持ちする製品にこだわり続けてきました。やがて、事業を多角化することで高度成長期に大きな発展を遂げることができました。ちなみに「良い品は結局おトクです」は現在も謳い続けています。

また、弊社は、いずれコンピュータがオフィスでの働き方を変えると予見し、銀行や金融機関がシステムを稼働しはじめて間もない頃、業界に先駆けて全社でオンラインシステムを導入したことから、「OA のオカムラ」と呼ばれるようになりました。「創造、協力、節約、貯蓄、奉仕」と社是にもあるように、「一流の製品をつくりたい」という意気込みで、創業以来、常に新しいことに挑戦し続け、新たな価値を創造してきました。

── オフィス家具を主力に取り扱われてこられた御社が、ラボ用設備に取り組むことになったきっかけを教えてください。

ラボ用設備は、オフィス家具から派生した分野のひとつで約 40 年も前から取り扱っています。その頃は小さい市場の中で専門メーカーさんの力が強く占めていて、なかなか太刀打ちできませんでした。

それでも専門メーカーにはない切り口で市場にアピールができれば勝機があるはずだと考え、現状を打破するために約 4 年前から営業・製品開発・販売促進の体制を整えました。

まずは、弊社が長年オフィス家具で培ってきた働きやすさや、知的生産性を上げるノウハウを研究開発の場にも取り入れてはどうかと提案したのです。そして研究者の視点に立ち、快適な環境を突き詰めていくことで、研究所をトータルでプロデュースができるのではないかという考えに至りました。

専門メーカーのように部分的ではなく「研究所はこうあるべきですよ」と示すことができる提案力こそが、総合メーカーの一番の強みです。ハード（製品）とソフト（ノウハウ）両方を持ち合わせていることが我々の強力な武器になっています。

インターネットが普及し、IT 技術がめざましく発展した世界で、私たちは大きな変化のまっただ中にいます。そんな時代の変化に対応するため、今後はさまざまな面で専門メーカーさんと協力していくことも大切だと考えています。

計測機器や電子機器を取り扱う作業に最適な実験台
「MI－Ⅱ Liberte（リベルテ）シリーズ」

天板基材はスチール製で高い耐水性や耐腐食性を実現した。
2015年2月発売新製品
「Freeway Wet Labo（フリーウェイ ウエットラボ ）シリーズ」

── 御社の製品からは、高い機能性や使いやすさが伝わってきますが、どのようなところにこだわっておられるのでしょうか。

あくまでも製品は人が使うモノですから、人間工学を考えることは基本だと思います。弊社は1962年にオフィス家具製品でグッドデザイン賞を初めて受賞して以来、オフィス家具業界では最多の受賞数となっています。ラボラトリー向けの製品でも、実験台やヒュームフードが受賞しています。グッドデザイン賞の受賞が必ずしも売上に直結するとは限りませんが、やはり高い評価をいただくことは、うれしいことですし、大きな自信になります。

創業当時からデザインは内製化していて、現在では全社で約260人のプロダクトデザイナーやインテリアデザイナーが社員として在籍しています。

弊社は以前から特注品のオーダーが多かったこともあり、社内では標準品も作りますが、お客様の要望に合わせてカスタマイズした特注製品作りも得意にしてきました。

── 近年、コストの面から海外で生産した輸入製品が安く大量に出回っていますが、こういった現状をどう考えておられますか。

同じものを安く大量に作ることは重要なことだと思います。ただ、多様化する市場ニーズに合わせて、デザインや高級感などの付加価値をつけて売っていくことも重要です。しかし、そういった付加価値をつけた製品はあまり多く売れません。少品種多量製品と、多品種少量製品をどう組み合わせていくかが、モノづくりをするメーカーにとっては大きな課題です。

余談ですが、古くからあるものを現代風にアレンジすると売れると言われています。例えばコンビニのおにぎり。日本人にとって身近なおにぎりに、徹底した市場調査と顧客目線の商品開発を行うことで大成功を収めているのでしょう。

── 御社は創業以来「ガラス張り経営」を標榜されておられます。御社の昔から変わらない経営方針、経営理念をお聞かせください。

先ほども述べましたが、社員が資金を持ち寄って創業した会社ですから、経理は内部の人材ではなく銀行から来た人にお願いしていました。現在でもその方針は変わらず、お金の流れだけは透明にしておくよう創業者が厳しく言っていたこともあり「ガラス張り経営」は弊社の不文律のひとつになっています。

そういえば、私の若い頃は「オカムラは開かれた会社」ということで、いつでも相談に来てもいいように社長室の扉は常に開いていました。

そもそも会社の文化や考え方というのは、どんなに時間が経過しても、会社を作った人間の長い影として会社の中に存在し続けるものだと考えています。その影こそが会社の価値観であり、それは決して変えてはいけないと思うのです。弊社で言えば「よい品は結局おトクです」というモットーであり、その理念は全社員にしっかりと浸透しています。

理念と同様に技術の伝承も重要です。モノづくりを

2008年、実験台で業界初のグッドデザイン賞を受賞。
あらゆる実験・研究に対応し天板の高さも調整可能。
ラボシステム「RIFORMA（リフォルマ）シリーズ」

2013年、グッドデザイン賞を受賞。
洗練されたデザインと高い安全性を備えた
ヒュームフード「Leger（レジェール）シリーズ」

背もたれのリングフレーム構造が、
しなやかな座り心地を生み出すオフィスシーティング「Sabrina（サブリナ）」2013年グッドデザイン賞。

職種別に国内の技術者の技能のレベルを競う「技能五輪全国大会」。岡村製作所の技術者は銅メダルに輝いた。

上下昇降デスク「Swift（スイフト）」。ボタンひとつで天板の高さが昇降する。

している企業として、若い技術者に今まで蓄積された技術を伝えていく必要があります。昔の職人は図面を見ながら、一生懸命に勉強していましたが、今はボタンひとつで機械が自動でやってくれるため、普通に仕事をしているだけでは技術は伝わっていきません。そこで5、６年前から技術を磨くための訓練センターを開設し、板金加工のベテラン職人などを講師に迎えて、図面の引き方や見方にはじまり、加工、溶接などの技術や技能を２ヶ月間、若手の技術者たちにみっちり叩き込ませました。彼らは技術を学び、吸収していくにつれて、学ぶことの大切さに気づき、感謝を口にしてくれるようになりました。こうした取り組みは時間と忍耐が必要ですが、会社としてこのくらいしなければ技術は伝承していかないと思うのです。

うれしいことに2014年の「技能五輪全国大会」に挑戦した２年目の若い技術者が銅メダルを獲得するまでに成長してくれました。出場者の中で自動車メーカーの技術者がやはり強かったのですが、その中に混じって、オフィス家具メーカーである弊社がメダルをいただけたことは賞賛に値すると思います。彼には「銅の次は金メダルを狙え」と激励を送りました。どんなことでも一生懸命やればできるということです。

── 中村社長の好きな言葉や座右の銘、また心がけていることなどはございますか。

大切にしているのは「継続は力なり」という言葉です。何事もずっとやり続ければできるようになると思うのです。振り向いてくれないお客様でも諦めずに何度もチャレンジすれば、いつか受注できる日が来るのですから。やり続けることで新しい発見があるのですが、みんなそれをやらないから、うまくいかないんです。

心がけていることは、何でも自分の目で見て確認することです。耳で聞いた話だけではわからないことも、問題意識を持って見ることで気づかされることがたくさんありました。なるべく現場やお客様のところには足を運ぶようにしていますが、最近はなかなか時間が取れないのが残念です。

── 最後に、科学機器業界全体に対してご意見などがありましたらお願いいたします。

日本は技術立国ですから、技術で稼がなくては潰れてしまいます。そのためにも「使う人の役に立つ新しいもの」を作り出して、需要を喚起していってほしいですね。そういった意味では、科学機器業界は人の役に立つ大事な業界だと思います。それと、働く人の職場環境を改善していくことも忘れないでほしいです。劣悪な環境では、従業員もすぐ辞めてしまいますし、いい製品を作り出すことはできませんから。

アクション映画でリフレッシュ！

趣味は読書、ゴルフ、将棋、写真などです。本のジャンルは問わず、小説から自然科学をテーマにしたものまで幅広く読んでいます。

休日はだいたい妻と買い物に出かけています。映画を観ることも好きなのですが、最近はもっぱら海外出張の飛行機の中で鑑賞することが多くなってしまいました。「００７」シリーズや「スパイダーマン」、「踊る大捜査線」など、どんな危機に陥っても主人公が死なないアクション映画が気に入っています。